

〈中本正智博士 著書紹介〉 『琉球先島方言
の総合的研究』

内間, 直仁

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

78

(終了ページ / End Page)

79

(発行年 / Year)

1995-02-24

『琉球先島方言の総合的研究』

内 間 直 仁

『琉球先島方言の総合的研究』は、中本さんの琉球方言研究の基礎固めの第三段階にあたる。中本さんは、与那国方言を長期間詳しく調査し、その成果を『琉球与那国方言の研究』として著した。次いで、奄美・沖縄諸島を調査し、それを『琉球方言の総合的研究』として著した。その一連の研究過程から、次は宮古・八重山方言の調査研究であることが必然的に見えてくる。平山輝男博士を中心として、昭和41年に宮古・八重山の本格的調査が始まり、その夏の調査には私も多少加わっている。この調査の結果をまとめたのが『琉球先島方言の総合的研究』である。中本さんの琉球方言研究の第一段階が与那国、第二段階が奄美・沖縄とすれば、宮古・八重山は第三段階、というよりは、若くて琉球方言研究の第一人者としての不動の基礎固めをした最終段階だったといえよう。

本書もまた557頁からなる大著である。内容も、前著『琉球方言の総合的研究』とほぼ同じく、第1編アクセント、第2編音韻、第3編文法、第4編語彙、そして総括、からなっている。宮古・八重山諸島の広い地域にわたって、各部門を尽くした記述的研究ということで、本書もこれまでにない画期的なものであった。

第1編アクセントでは、従来ほとんど明らかでなかった宮古・八重山方言のアクセントについて、主要方言はもちろんのこと各島々の方言も（おおよそ26地点）調査し、4拍語までの体系を記述している。そしてこれまで調査してきた各地の体系を比較し、琉球方言アクセントの系譜も提示している。

第2編音韻では、宮古諸島8地点、八重山諸島8地点、合計16地点の音素体系および音韻対応について記述している（音韻対応が示されていない地点もある）。その結果を概略示すと、以下の通りである。（1）宮古・八重山方言は、i、e、ɪ、a、o、u、の六母音体系をなす。ただし、池間方言等のように、ɪが認められない方言もある。また、波照間方言は、5母音にɪ、eが加わって、7母音体系をなす。（2）奄美方言のɪが共通語の「え」に対応するのに対し、宮古・八重山方言のɪは「い」に対応する。（3）ɪと結合する子音には強い摩擦音がともなう。（4）ハ行子音はウ段以外は、p音を保っている。（5）子音にf、Vが認められる。（6）成拍のm、Vが認められる。（7）八重山方言はfがhに変化するなど、宮古方言より変化した姿を見せる。

第3編文法では、動詞、形容詞の活用体系、代名詞の体系などについて記述している。地点も宮古諸島で10地点、八重山諸島10地点の計20地点に及ぶ。活用体系も、これまでほとん

ど明らかでなかった同地域について、これほど多くの地点にわたって記述した本書の学術的価値は、言うまでもなく大なるものがあった。

宮古・八重山方言の終止形の成立についても、本書では新しい説を提示した。たとえば宮古方言（平良市）では、「書く」の終止形は、*kakī*、*kakīm*、八重山方言（石垣市）では、*kaku*、*kakun*、の二形があらわれる。それらの成立について、本書では、奄美・沖縄方言と同様、宮古の *kakī*、八重山の *kaku* は「書き居り」から成立し、*kakīm*、*kakun* は「書き居るもの」から成立していると説く。それに対して、私などは、別の見方をしているが、いずれにしても、宮古・八重山の終止形の成立について、議論の場を提供した本書の意義は大きい。

第4編語彙は、前著『琉球方言の総合的研究』と同じように、基礎語彙600余語について、宮古・八重山を中心に、奄美・沖縄方言や鹿児島、京都の方言とも語形比較ができるように配列して示したものである。たとえば、代名詞「私」の語形を知ろうと思えば、その欄に奄美大島名瀬から与那国にかけての方言形が示されていて、比較考察できるようになっている。

前著『琉球与那国方言の研究』『琉球方言の総合的研究』によって、与那国方言および奄美・沖縄方言の研究基盤が確立されたとするならば、本書『琉球先島方言の総合的研究』によって、宮古・八重山方言の研究基盤が確立されたといえよう。この三著によって、琉球方言全体のみわたしができ、それを基礎にしてある特定方言の研究をさらに深く進めることができるようになった。琉球方言研究および日本方言研究において、この三著のはたしている役割は大きい。

平山輝男・大島一郎・中本正智共著 昭和42年 明治書院



言語研究の喧嘩仲間明大教授一泉知永氏と談笑する中本先生